日本の平和

1

現在の日本が平和なのは、東南アジアが独立しているからである。昔は、東南アジアはヨーロッパ諸国の植民地だった。そのため、宗主国の意思によって、そこで産出される資源の使い方が決定された。宗主国が日本に敵意を持つならば、日本への資源の輸出を差し止めることもできた。それが戦争のきっかけになりえたのである。

しかし、我々の戦争の結果として、東南アジアや東アジア諸国の独立は達成され、ヨーロッパ人による植民地体制は崩壊した。それによって東南アジアだけでなく、サウジアラビアやイランの石油も、その土地に住む人々の意思によって、処分することができるようになった。そのことが、日本の平和を支えているのである。

現代の日本人が平和を享受できているのは、かつて勇敢に戦った日本人のおかげである。我々は、そのことに感謝しなければならない。

ヨーロッパ人は基本的に、他人の迷惑を考えず、自分の利益のみを求める。そういう人々が世界を支配するならば、その社会は非常に不安定なものとなる。ゆえに、彼らの支配体制が崩壊したことで、この世界はより安定な状態へと移行したわけである。

しかしながら、この世界を不安定にさせうる要素がまだ残されている。西洋帝国主義の唯一の残党であるアメリカが、いまだに世界の秩序を乱し続けているのである。我々は彼らをおとなしくさせて、世界の平和を揺るぎないものにしなければならない。

2

大東亜戦争を植民地獲得のための戦争、覇道のための戦争だったと考える人間には、日本は敗北したと認識される。一方で、あの戦争を王道のための戦争、世界の平和のための戦争だったと考える人間には、日本は勝利したと認識される。

開戦の詔においても終戦の詔においても、天皇陛下は、世界の平和のためにやむなく戦争という手段に訴えたのだ、と仰せられている。にもかかわらず、あの戦争を侵略戦争だったと考える人間は、天皇陛下は嘘つきだった、と言っているに等しい。

なぜ、愛国者を自称する人間が、あの戦争を侵略戦争だったと考えているのか。なぜ日本は敗北したと考えているのか。なぜ陛下の御心が理解できないのか。

敗北は教訓である。それを敗北と認識すること自体が、一つの罰である。

日本の平和

学者

ある種の学者たちは、西洋の学問にどれほど価値があるか、ということを盛んに説いている。そういう人々は、ヨーロッパの学問だけが真実であって、それ以外はまやかしである、という印象を人に植え付けようとしている。いまだにこういう人たちがいるのは不思議ではあるが、かといって、彼らの活動を非難すべき理由もない。

たとえば西洋医学を学んだ医者は、東洋の医学には根拠がないと言う。なぜそんなことを言うかといえば、そう言わないと商売にならないからである。東洋医学の方が西洋医学よりも優れているということになれば、彼のところには患者が来なくなってしまうだろう。そうならないように、商売相手を悪く言って、自分の株を上げようとしているのである。しかし、それは別に悪いことではない。自分の仕事の価値を強調して、それを周りにアピールするということは、自然の権利として認められるべきである。

それと同じように、西洋の学問を学んだ学者たちは、自分の生活のためにそれを良く言うのであって、そのこと自体は、とりたてて非難するほどのことではない。

もちろん、批判は大いにするべきである。西洋のものだからといって、何でも正しいということにはならない。厳しい批判にさらされることによって、学問は発展するのである。

責任

責任をとるとはどういうことだろうか。

ある人が言うには、人間には責任をとることなどできない。だから、できることを精いっぱいやればいい、のだそうだ。

そういう人の話をよく聞いてみると、「責任がある」という文を、「責任」という名詞と「ある」という動詞に分解して考えていることが分かる。次に彼は、この文は、「責任」という名詞によって表現される何らかの抽象的なものが存在している、ということを意味しているのだ、というふうに分析を行う。そして、この責任なるものが存在したとして、それをいち個人に処理することができるのかどうか、という風に考察を進めて、そんなことはできるはずがない、という結論に到達する。そもそも、そんな抽象的なものが存在したとして、それを見ることも触ることもできないのだから、人間に処理できないのは当然である。

こういう人は、言葉の正しい使い方を知らない。責任がある、あるいは責任をとる、という文が意味していることは、次の二つである。一つは、人に迷惑をかけないこと。二つは、自分の行いが間違いだと分かったら、それをやめて、正しい行いができるように努力することである。責任という言葉のこれ以外の使い方は、この基本的な意味からの類推によって理解されるべきである。

一つの文を単語に分けて考察しても、何の成果も得られない。それはただの言葉遊びである。

表現の自由

1

表現の自由とは、正しいことを言う自由である。間違ったことを言う自由は存在しない。この点に混乱があると思う。

仏教では、身・口・意の三業に気をつけろと言う。このうち身と意、つまり身体と心の行いに気をつけろ、というのは現代の人にもよく分かると思う。しかし、口の行いに気をつけろ、というのは理解しにくいのではないか。

たとえば、人を殺してはいけないとか、心の中で人を害することを考えてはいけないとか、そういう話は分かりやすい。それは身体と心の行いである。では口の行いとは何かといえば、たとえば嘘をついたり、守れもしない約束をしたり、人に気に入られるために適当なことを言ったり、人の悪口を言ったり、そういうことである。それは、やってもやらなくてもいいことではなくて、やってはいけないことである。そういう意識が現代人には欠けている。

嘘をつくのは悪いことだし、守れない約束をするのも悪いことである。それは、人を傷つけたり、人のものを盗んだりするのと同じように、悪いことである。それを悪いと思わない人が多いのは、どうやら、法律で禁止されていないなら何をしてもいい、と考える人が多いせいではないか。

嘘つきを法律で罰することはできない。それはそもそも不可能である。だからといって、嘘をつくことは悪いことではない、ということにはならない。法律で禁止されていなくても、悪いことは悪い。それが分からないと、言葉による行いに注意しろ、ということも理解できない。

そして、表現の自由に対する誤解が、この状況をより悪化させている。表現の自由とは、何を言ってもよいということではない。人間には、言っていいことと悪いことがある。正しい言葉の使い方と、間違った言葉の使い方がある。正しいことを言う自由は誰にでもあるが、間違ったことを言う自由は誰にもない。それが表現の自由の本来の意味である。

2

もともと表現の自由というものは、政治的な文脈から出てきたものだろう。したがって、表現の自由という言葉は政治的な発言の自由を意味しているのであって、それ以外のことを意味しているわけではない。にもかかわらず、西洋人はどんなものでも政治と結びつけて考えようとするので、あらゆる場合に表現の自由が認められるべきだ、と考えられるようになってしまった。しかし、人間のすべての活動が政治的であるわけではないし、また、そうあるべきでもない。個人のあらゆる言動が政治的であると考えることは、一種のパラノイアである。

西洋人にとって権力とは絶対的なものであり、人間の生活全てに行き渡っているものである。彼らがそう考えるのは、政治的な権力を神の力と類比的に理解しているからである。この世界に神の力が及ばない場所はない。そして、政治の力は神の力と同じものであるべきなので、人間の生活全てに政治的な権力が行き渡っていなければならない。そういうふうに権力の絶対化が進んだ末に、個人のあらゆる発言を政治的なものとみなすような、精神的な風土ができあがる。このような、政治の絶対化という極端な思想が一方にはある。

そのような状況の中から、あらゆる場面において表現の自由が保障されるべきだ、というもう一つの極端な思想が出てくる。政治の絶対化と表現の自由という二つの思想は、互いに正反対のように見えるが、個人の生活すべてが政治的である、と考える点では同じものであり、どちらも同様に窮屈な思想である。

現実には、政治的な発言もあれば、政治的でない発言もある。政治的でない発言も政治的である、というのは一種の詭弁であって、そのような理屈が許されるのであれば、男でないものも男であることになるだろう。そんな詭弁を許してしまったら、まともな議論はできなくなる。

一般的に言って、表現の自由は許されない。すべての人間は、言葉の使い方に注意しなければならない。ただし、政治家が不正をしているならば、それを暴く権利は誰にでもあるし、それを妨害することは許されるべきではない。

しかし、そんなことは当たり前のことであって、わざわざ表現の自由などという大げさな言葉で強調する必要もない。ヨーロッパという道徳が退廃した世界では必要な概念だったのだろうが、もともと日本には必要のない言葉である。

「大道廃れて仁義あり」とは、こういうことを言うのだろう。表現の自由がもてはやされる社会は、すでに手遅れである。

森友学園問題

1

二〇一八年三月、森友学園の国有地払い下げ問題に関連して、財務省で公文書の改ざんが行われていたことが発覚した。一部報道によれば、事件の真相は、安倍首相夫人と交友があった同学園の籠池理事長のために、首相本人が口利きをした事実を隠蔽するためのものだったという。もちろん、報道の通りに隠蔽が実行されたのだとすれば、首相が関係していたことを示す証拠は残されていないはずなので、この報道は推測に基づくものであろう。いずれにせよ、現役の公務員による公文書の改ざんという問題は、重大である。この事件の責任は誰にあるのだろうか。

直接には、改ざんを実行した財務省の職員である。しかし、それが職務の一環として行われたのだとすれば、組織全体の責任が問われなければならない。つまり、その職員に改ざんを指示したのは誰なのか、という問題が次に出てくる。そうすると、責任はその職員だけではなく、彼の上司にもあることになる。だが、その上司も誰か他の人間から指示を受けたのかもしれない。さらに、その職員に行政の仕事を行わせていた責任、つまり任命責任というものについても考えなければならない。

さて、こういった問題を含めて、行政の仕事全体に対して最終的に責任を負うのは誰かと言えば、それは行政の長たる内閣総理大臣である。したがって、安倍晋三本人が文書改ざんや国有地の払い下げを指示したのであれ、しなかったのであれ、どちらにせよ彼一人が辞めればそれで済んだ話である。なぜならば、どちらの場合でも、全ての責任は彼一人にあるからである。

にもかかわらず、あくまでも我を通して首相の座に居座り続け、それによって、一方では政府内部に混乱を引き起こし、他方では政治に対する国民の信頼を失わせたことは、国家にとってこれ以上に大きな害はない。そういう人間がいまだに首相を務めているのだから、日本国民として情けない限りである。我々は、彼の名前が歴史に残らないように、気を付けなければならない。

2

この事件が発覚した時に、彼は辞めるべきだった。しかし、実際には辞めなかった。その罪は重い。

彼は、責任の所在を明らかにすることができなかった。責任とは責任感のことであり、自分の仕事に責任を持つということである。それは、自分の仕事に落ち度があれば自分でそれを正すということであり、また、自分の仕事の範囲で問題が起きないように注意を怠らないということであり、また、それが可能になるように自己の向上に努める、ということである。

組織の長たる人間の務めは、直接に一人ひとりの職員を指導するということではなく、自分の仕事にどう向き合えばよいか、という手本を示すことである。組織の長の振る舞いによって、その組織に属する人間の振る舞いは変わってくる。一人ひとりの職員が責任をもって自分の仕事に取り組むためには、まず、組織の長がそのような姿を示さなければならない。

責任とは、どこかにあるものではない。規則の上でその人に責任があるとされているだけで、実際には彼がその組織を直接指導したのではないのだから、彼に責任があるとは言えないのではないか、と思う人もいるかもしれない。そう考える人は、責任というものを理解していない。

責任とは、組織の在り方を決定付けるものである。規則が組織の形を決めるのだとすれば、規則こそが責任そのものである。規則が提示するのは、その組織がどうあるべきか、という規範であり、その規範に沿って行動することによって、組織そのものが形を与えられるのである。

規則がなければ組織はない。規則を守る人間がいなければ、その組織は存在しないのと同じである。そして、規則を実践しようと努めることが、責任をとるということである。責任ある行動によって、初めてその組織は現実に姿を現すのである。もしも、ある人が規則を無視し、責任をとることを拒否するならば、そしてもしも、それが組織の長であったならば、その瞬間に、その組織は存在することをやめるだろう。

行政の長の責任は非常に重い。それは、政府という組織の長であるだけでなく、国民全体の長でもある。彼の振る舞いによって、国民全体が影響を受ける。彼の振る舞いが、この国の形を決めるのである。果たして、その人がこの国にふさわしい人間であるかどうか、我々は考えてみなければならない。

3

責任に対する考え方の混乱の根本には、欧米人独特の、因果律に対する誤った考え方がある。彼らは、因果律と決定論を混同している。そのため、直接の影響があるかないか、ということで因果律を判断しようとする。よって、どこに責任があるのかという問題も、直接の因果関係によって理解しようとする。これは本当に馬鹿げたことで、あ

まりにも馬鹿げているので何も言えないくらいなのだが、できる限りの説明をしようと思う。

因果律の本質は場合分けである。場合分けの考え方によってしか、因果律を捉えることはできない。そして、因果律と責任は無関係ではない。責任について考えるためには、因果関係について考えざるをえず、そのためには、場合分けの考え方をする必要がある。

我々は、ある出来事が起きた場合と、起きなかった場合の結果を比較することで、原因と結果のつながりを把握できる。過去に起きた出来事であれば、それが起きなかった場合を考えることによって、因果関係を把握することができる。それは想像力というような胡乱なものではない。我々が日常生活の中で普通にやっていることである。それを、自分の生活を離れて、自分から少し遠い物事に当てはめてみるだけでよい。

現実に起きることは一回限りなので、起きることは起きるし、起きないことは起きない。なので、現実に起きたことだけを見ていては、因果関係を把握することはできない。これこれのことが起きなかったならば、どうなっていたか、ということを考えることで、初めて因果律は姿を現すのである。

それが頭を使うということなのだが、今はそんなことすらできる人が少なくなった。特にジャーナリストという人種は、政府や警察の言うことをおうむ返しにするだけで、ものを考えるということを全くしない。そんな仕事なら猿にもできるだろう。

現実に起きたことしか見ない人間には、現実を理解することはできない。現実には起きなかったことが、現実を構成しているのである。

歴史と文学

1

物語は面白くなければならない。どれほど人に伝えたいことがあっても、話がつまらなければ聞いてもらえない。聞いてもらえなければ、話す価値もない。だから、人に伝える価値がある物語ほど、面白くなければならない。

ゆえに、歴史は最も面白い物語でなければならない。歴史ほど、人に伝える価値のあるものはないからである。それに、どんなに面白いフィクションよりも、現実の方がずっと面白い。歴史をそのままに記述すれば、それ以上に面白い物語はない。

もちろん、そのままに、というのは、当時の記録を一字一句そのままに書き写す、といったことではない。そうではなく、実際に起きたことを書く、ということである。

それを不可能だと考える人もいるかもしれない。それこそフィクションだと言う人もいるだろう。では、そういう人にとって、フィクションではない歴史とは何なのか。我々が利用しうる歴史資料は、すべて人間の手によって残されたものである。そこに記述者の主観が混じっていない、と考えるべき理由があるのだろうか。

歴史を物語にする、ということに異議を唱える人がいる。そういう人は、物語には主観が混じっているという理由で、物語は歴史ではないし、歴史は物語ではない、と考えているのだろう。しかし、どんな資料にも主観が混じっているのであれば、主観が混じらない歴史というものはありえない。それは、物語という形式を取ろうが取るまいが同じことである。そうであるならば、物語は歴史ではない、という主張にも根拠がないことになる。

では、客観的な歴史は果たして可能なのかといえば、もちろん可能である。それは、因果関係を追求することによって可能となる。現実とは原因と結果のつながりである。したがって、因果関係を正確に記述することができるならば、歴史を客観的に記述することも可能になる。そして、因果関係を理解するということは、現実には起きなかったことについて考えるということである。そうした営みによってのみ、客観的な歴史の記述は可能となる。

現実に残された資料をいくら丁寧に調べても、歴史を知ることはできない。客観的な歴史の姿は、現実には起きなかったことを見つめることで捉えられる。それを主観と呼ぶのは勝手であるが、しかし、それ以外の方法で現実に迫ることは決してできない。こうした歴史の記述を否定する者は、全く歴史を知らずに一生を終えることになるだろう。

現実をありのままに記述した歴史が、正しい歴史である。それは不可能ではないし、おそらく物語という形によって、最も正確な表現が可能となるだろう。そして、それは必ず道徳的な教訓を含んでいなければならない。なぜならば、そういう物語が最も面白いからである。本当に面白い物語は、その本質に道徳に訴えるものがある。千年後まで残る物語があるとすれば、そういうものだろう。

歴史を誠実に記述するならば、そこには必ず道徳が現われてくる。それを避けることはできない。なぜならば、道徳とは現実そのものだからである。道徳について語らずに歴史を記述しようとすることは、必ず作為を生む。どうあがいても、それは不自然な歴史になる。道徳について語ることを恐れてはならない。歴史を記述することは、道徳を記述することである。

2

キリスト教徒は、道徳について語ることを恐れる。なぜならば、自分自身が道徳的でないことを知っているからである。だから、彼らは歴史を記述できない。歴史を正確に記述するならば、道徳が明らかにされてしまうからである。そうなれば、彼らの正体がばれてしまう。そのため、彼らは歴史から道徳を切り離そうとする。それは歴史を無力化する試みであり、彼らの保身である。しかし、道徳抜きに歴史を語ることはできない。ゆえに、現代人は歴史を知らない。歴史というものが存在することすら知らない。歴史の存在そのものを否定しようとする文化の中で生きているからである。

西洋文明は無知の文明である。それは実際、文明ではない。西洋文明は存在しない。なぜなら、それは歴史を持たず、道徳を持たないからである。

3

歴史修正主義の対義語は、釈明主義である。これは、たとえば広島への原爆投下を、何とか理屈をこねて釈明しようとする態度を表現したものである。あれは明らかにただの犯罪だが、アメリカ人は、いまだにあれを必要な行為だったと考えている。それは、彼らが釈明主義史観をとっているからである。

歴史修正主義とは、連合国政府によって作られた、もっともらしい公式の歴史認識を、あくまでも学問的に批判しようとする態度である。その代表はアメリカの歴史学者チャールズ・ビアードだと思う。歴史修正主義を批判する人は、まず彼の本を読んでみてほしい。

最も深刻な歴史認識の隔たりは、日本と韓国や中国との間にあるのではなく、日本とアメリカの間にある、ということを理解するべきである。日本人はこれ以上、アメリカという国家の異常さに目をつぶるべきではない。

我々は、どうして広島と長崎に原爆が落とされたのか、どうしてこれらの都市でなければならなかったのか、どういった議論の末に原爆の投下先が決定されたのか、何も知らない。なぜならば、アメリカ政府がすべての資料を隠しているからである。アメリカは、世界で最悪の秘密国家である。

彼らは安全保障上の理由から資料を公開できないと言うが、七十年以上も前の資料に、どうして安全保障上の価値があるのだろうか。彼らの言い分は支離滅裂であり、何かを隠そうとしていることは明らかである。それが何であるかは既に述べたので、ここで繰り返すことはしない。日本国民には、アメリカという国家について、もう一度よく考えてみてほしい。

4

普遍性は歴史においてのみ証明されうる。ある人が普遍を求めるならば、彼は行為によってそれを示さなければならない。やがて歴史がそれを判定するだろう。

西洋文明に普遍性はない。彼らの歴史には例外しか見られないからである。

社会の構造

1

ひきこもりの問題が示しているのは、この社会の構造である。

現代社会の構造を支えているのは、ただ一つ家庭だけである。人間はどこまで行っても家族から自由になることはできず、家族関係の中にとらわれ続けるしかない。戦前であれば、軍隊生活というものが、ある程度は社会の構造を支えていた。多くの人間が軍隊での生活を経験し、そこでの人間関係が社会的なつながりを作り出していた。その強度は、家族のつながりと比べても弱くはなかっただろう。

しかし現代では、家族のつながりが、他の何とも比べようがないくらい強くなってしまっている。そのために、個人が抱えるあらゆる問題が、家族の問題として捉えられてしまうのである。それは不幸なことである。

これは国家の形に関わる問題である。近代国家の根本には血縁関係がある。家族関係を基本として国家が形作られている。しかし、人間が作りうる関係はそれだけではない。職業によるつながりや、学問によるつながりなど、様々なつながりがありうる。そして、それらはすべて、家族関係に代わりうるものである。社会の構造は、必ずしも家族が基本でなければならないわけではない。

ひきこもりのように、家庭内の問題と考えられているものの一部は、実際には近代国家の歪みの現れである。我々は、性愛が人間の本質である、という考えから距離をとらねばならない。

2

ひきこもりの子どもが気に入らないならば、家から追い出して縁を切ればよい。しかし、それで子どもがホームレスにでもなって、ホームレスはよくないからということで、市役所に捕まって家族のところに送り帰されたりすると、元の木阿弥である。このように考えると、すべての人間は必ずどこかの家族に属していなければならない、という現代社会の構造に問題があることが分かる。

ひきこもりは悪いことではない。悪いことは何一つしていない。もしも、ひきこもりの子どもを殺す親がいたならば、百パーセント親が悪い。

3

西洋人は、家族関係を絶対的なものと考えている。しかし、そう考えなければならない理由はない。なぜならば、人間は、一度生まれてしまえば、それ以上家族を必要としないからである。自由にどこからでもスタートしてよい。

これは、そうあるべきだ、ということではなく、実際にそうである、という話である。人間は家族関係の中にあり続けるべきだ、という意見はありうるが、それは願望に過ぎないし、そうすべき理由もない。そうでなくても人間は生きてゆける。

性的マイノリティが問題とされるのは、家族を絶対視するような文脈においてだけだろう。それは、性愛を絶対視する文脈と言うこともできる。人間は性的なものであらねばならない、と考えるから、その例外と見えるものに過剰に反応する。人間は必ずしも性的なものではない、ということが分かれば、そのような問題は消えてしまうだろう。

西洋人は性にこだわり、家族にこだわる。彼らには、家族にとらわれない人間が想像できない。性的欲求にとらわれない人間が想像できない。それは、彼らが仏教を知らないからである。

キリスト教は、彼らの家族に対する考え方を、一つの神話に仕立て上げたものである。彼らは神の話をするとき、実際には家族の話をしている。それを大げさな表現で言い換えているだけである。

キリスト教とは家族への信仰である。そこには宗教的な要素は一切認められない。理性も理想もない、幼児の宗教である。

4

私は、ヨーロッパ文明を観察し尽くし、蒸発させてしまいたい。これほど不愉快でおぞましいものは他に見たことがない。しかしおそらく、私以上にその本質を理解している人間もいないだろう。

私には伯夷と叔斉の気持ちがよく分かる。見たくないものは見ないほうがいい。見ないで済むならそれが一番いい。

私は、私より後に生きる人々が、西洋の歴史や学問を学ばないで済むようにしたい。誰もヨーロッパを知らない世界を作りたい。それが私の願いである。

人間は記号である

1

人間は記号である、とパースは言った。

記号と物を区別する考えが西洋にはある。しかしパースによれば、物は記号の一種でしかない。なぜかといえば、物が存在するという考えがそもそも誤りだからである。

あるものの存在を知るとき、我々は、それを何らかの感覚器官を通して知ることになる。最も分かりやすいのは目であろう。目でものを見るとき、我々はものを直接見るわけではない。我々が見ているのは、ものの表面で反射された光である。その光は何らかの光源から発されたものであって、光源の種類が異なれば、ものの見え方も異なる。

では、ものの見え方が異なれば、もの自体が異なると言えるのか、といえば、それは少し違う。そもそも、ものが光を反射するとき、そのもの自体も変化しているからである。光は電磁波の一種であり、電磁波とは、電場と磁場の変化が空間を通して伝わる現象である。そして、ものが光を反射するということは、そのものがあらかじめ持っている電磁場が、入射してくる電磁波と作用することによって、新しく散乱波が作られる過程である。その際に電磁的な相互作用を通して、ものの方も変化を受けることになる。つまり、光を反射する反動を、ものの側も受けているということである。

そのように、ものが変化する過程を伴わずに、我々はものを見ることはできないし、また、他のどんな感覚作用についても同じことが言える。ものの方が変化せずに、ものを知覚することはできない。ゆえに、ものを見る前と後とでは、それは別のものに変化してしまっているのである。

感覚とは変化であり、変化を通してしか、我々はものの存在を知ることはできない。そして、その存在を知ったときにはすでに、それは別のものになってしまっている。ゆえに、我々はものそのものを知ることはできないし、そもそも、それが存在するという考えが間違いである。この世界は、存在者によって成り立っているのではない。変化によって成り立っているのである。何らかのものが存在するという考えが誤りであるというのは、そういう意味である。

そして、記号とは変化である。我々はふだん、記号を変化しないものように考えているが、そうではない。紙に印刷された文字を見るとき、我々は紙の表面で反射された光を見ている。光を反射することによって、インクと紙の構造が変化する。それによって、記号の表現そのものが変化しているのである。記号とは静止したものではなく、常に変化し続けるものであり、そうでなければ、記号としてのはたらきは為しえない。

ある記号が我々に作用しうるためには、それは我々の知覚に訴えるものでなければならず、我々の知覚に訴えるためには、それは変化するものでなければならず、変化するものであるということは、それはものであるということである。ゆえに、記号はものであり、ものは記号である。しかし、記号はそれ以上のものでありうる。

ものが何であるかということを定義することは難しいが、一定期間同じ形をとっているように見えるもの、という定義が妥当ではないかと思う。そう考えると、ものは記号でなければならないが、記号がものでなければならないとは言えない。記号とはこの世界そのものであるが、ものはその一部分でしかない。ものは、記号の現れ方のほんの一側面でしかない。

人間は記号であるとは、おおよそ以上のような意味であろう。そ

ここには同時に、諸行無常と諸法無我の考えが含まれていると言える。ゆえに、パースを理解するためには、仏教の認識論が役に立つだろう。パースという人間は、つくづくアメリカにはふさわしくない人であった。

2

仏教の用語を使えば、物を知覚するときに、物の側に反作用が生じることを有対という。反作用が生じないことを無対というが、これは、思考を知覚作用の一種として捉えているからである。仏教では知覚作用は六つあるとされる。いわゆる五感と思考作用である。思考が知覚に数えられるのは、それがものの認識に基づいているからだと考えられる。

たとえば晩御飯の献立を考えるときに、今日はカレーを作ると決めたとしよう。そうすると、カレーを作るためには玉ねぎとトマトと鶏肉が必要で、鶏肉は冷凍してあるからそれを解凍して、などなど色々と考えをめぐらすことになる。そのように思考作用を行うために必要なのは、個々のものの認識である。まずカレーの認識があり、玉ねぎとトマトの認識があり、それらの間の関係を思考するわけである。

このような思考作用を、知覚作用とひとつながりのものと考えることは不自然ではない。ものの認識は感覚作用とは別のものだが、それ自体を一つの知覚作用と考えることもできる。そして、思考作用が無対であると言われるのは、玉ねぎについて考えるだけでは、現実の玉ねぎには反作用が生じないからであろう。

六識とは、眼耳鼻舌身の五識と意識を合わせたものである。このうち前者五識が有対と言われ、意識は無対と言われる。

3

私の書いた文章をあなたが読むとき、蛍光灯から放出された光が紙の表面で反射し、それがあなたの水晶体を通って網膜を刺激し、その刺激が脳に達してシナプスの構造が変化する。そしてあなたは私の意見について、これは正しい、これは間違っている、これは気に入らない、これは好ましい、というように色々な判断を下す。それらの考えがもしかするとあなたの手を動かし、文章を書かせ、あなたの意見が私のところにまで届くかもしれない。それら一連の現象全体が、一つの記号作用である。

記号は静止したものではないし、紙と紙の間に挟まっているようなものでもない。それは運動するものであり、流れるものであり、人間を動かすものである。人間のあらゆる活動は、一つの記号作用として理解できる。

記号は人間の外にあるのでもないし、内にあるのでもない。それは外から内に運動を伝え、また内から外へと運動を伝える。それは、どこかにある、と言うことはできないが、どこにもない、と言うこともできない。それはたしかに活動を引き起こすが、どこか一か所に存在するものではない。それは空である。それは無常である。それは縁起である。記号は人間そのものである。

私自身は、パースは辟支仏であったと考えている。辟支仏とは、仏の教えによらずひとりでに悟りを開いた者で、菩薩でもなく仏陀でもないが、仏の一種である。彼は本当に偉大な人であった。

ちなみに、デューイが反射弓に関する論文を書いたのは偶然ではなく、それはおそらくパースの記号論に対応している。パースにおける記号は、心理学的・生物学的な反射弓の概念を一般化したものだと言える。私の意味単位の理論も、彼の記号論の一変種である。

プラグマティズムとは何か

パースはプラグマティズムの創始者と目されている。だが、彼自身は自分の立場をプラグマティシズムと呼び、ジェームズらの哲学運動から区別していた。

現在では、プラグマティズムは価値の相対化や真理の相対化を目指す立場だと考えられている。それぞれの言葉には実用的な価値しかなく、哲学的な用語の実在性を信じるべきではない、というアンチ哲学として理解されていると思う。

アンチ哲学という点はたしかに正しい。それはパースの目指したものでもあった。しかし真理の相対性という観点は、彼には決して受け入れられなかった。

プラグマティズムは、絶対的な真理を探究するための活動である。少なくとも、そのような活動としてパースによって始められたものである。プラグマティズムとプラグマティシズムの違いは、過去の哲学に対する認識にある。それがヨーロッパ哲学の否定であることに違いはない。では、ヨーロッパの哲学とは何であるか。

ジェームズ以下のプラグマティストは、それを真理を探究する試みだと考えた。よって、古い哲学を否定することは、真理の絶対性を否定することである、という結論に至った。一方でパースにとって、それは真理への道に立ちふさがる障害に見えたのである。ヨーロッパの哲学とは、曖昧な言葉づかいで真理をうやむやにし、それを相対化してしまうことである、と彼は認識した。ゆえにプラグマティズムは、真理の相対性を否定し、絶対的な真理を探究する試みでなければならない。この点に、二つの学問の決定的な違いがあった。

この隔たりはあまりにも大きく、パースとジェームズは最後までお互いを理解することができなかった。そして、現在でもその違いは理解されないまま、ジェームズの思想のみが生き残っている。

パースのプラグマティズムは、ヨーロッパの伝統から隔絶した真に新しい学問的な試みであったが、ジェームズのそれは、ヨーロッパ哲学のバリエーションに過ぎなかった。だからこそ現在の思想界でも評価され、受け入れられているのである。

誰も本当のプラグマティズムを知らない。私は、ジェームズの思想がプラグマティズムとして紹介されているのを見ると、悲しくなる。人知れず学問に打ち込み、不遇のまま死んでいった人を思い出してしまうからである。

彼は誇り高い人だった。周りに合わせて自分の意見を変えるようなことはしなかった。それを偏屈と呼ぶのは間違っている。それは誠実と言うべきである。彼は、ヨーロッパ世界が持ちえた最高の精神であった。

徳は教えられうるか

プラトンは対話篇『メノン』において、徳は教えられうるか、という問題を提起している。そこでは明確な回答が与えられているわけではなく、また、哲学者がこの問いに答えられた例はない。

しかし、その問題はすでに仏陀によって解かれている。徳を教えることはできる。それは物乞いによってである。

徳とは憐みの心であり、他者を思いやる心である。では、それはどのようにして身に付くのか。それは元々その人に備わっているものなのか、それとも学習されるものなのか。赤ん坊には徳が備わっている

ように見えないことから考えれば、それはおそらく学習によって身に付けるものである。そして、学習は繰り返しによって行われる。

上手く文字が書けるようになるためには、何度も何度も文字を書く練習をする必要がある。それと同じように、徳を身に付けるためには、まず徳を実践する必要がある。自分の持ち物を他者に分け与えるということは、人間の徳の一つである。したがって、他者への施しを繰り返すことによって、徳を学習することができるはずである。そして、ある人が施しを為しうるためには、それを受け取る人がいなければならない。そのために必要とされるのが、乞食業者である。

修行者が家々を回り、食を乞う。家人が施しをすると、修行者は彼に祝福を授ける。そうして物乞いを続けることによって、人々の間に徳を育てることができる。それが、プラトンの問いに対する仏陀の答えである。

仏陀は全ての問題に答えを与えている。彼が現われた後には、哲学者の仕事は何一つ残されていない。哲学は、二千五百年前にすでに終わっているのである。

ＳＴＡＰ細胞

私は、ＳＴＡＰ細胞の発表を聞いたとき、ｉＰＳ細胞があるなら、ＳＴＡＰ細胞があってもおかしくない、と思った。細胞の万能化の仕組みはよく分かっていないので、そもそも、ｉＰＳ細胞がどうして上手く行くのか誰にも分からない。だから、同じような万能化であるＳＴＡＰ細胞の話が出てきても、そんなことはありえない、とは誰にも言えなかったのである。

科学というものは、原理があって初めて成り立つのだが、現在の生化学の分野には原理が存在しない。ｉＰＳはたまたま上手く行ったように見えるし、それならばＳＴＡＰ細胞があってもおかしくない、ということになる。しかし、もしも生化学の分野に指導的な原理があったならば、その原理に照らして、どのような現象は起こりえて、どのような現象は起こりえないか、ということがあらかじめ分かるはずである。そういう原理が存在しないので、どんなことでも起こりえると考えるしかないし、ある現象が起きるか起きないかは実験をしてみないと分からない、ということになる。だが、そんなものは科学とは言えない。

セントラルドグマはもう古い。それは半世紀以上も前に作られた理論であり、最近になって発見されたエピジェネティクスという現象を十分に説明できているとは言えない。そういう古い理論をいつまでも後生大事に信じているから、ＳＴＡＰ細胞のようなみっともない騒ぎも起きる。あの騒ぎは小保方博士一人の責任ではなく、生物学者全体の責任であり、職務怠慢である。

我々は、セントラルドグマに代わる新しい原理を見つけなければならない。それが、これからの生物学者の仕事である。

スポーツと教育

親は、子供にスポーツばかりさせてはいけない。ちゃんと勉強をさせねばならない。

野球ばっかりやっている子供が、将来みんな野球選手になれるとは限らない。勉強をしないで野球ばかりやって、それで野球の仕事にも

就けなかったら、ただの馬鹿になってしまう。それはあまりにも可哀そうである。

スポーツはただの遊びである。大の大人が人生をかけてやる分には放っておくしかないが、子供にスポーツばかりやらせるのは問題である。

だいたいスポーツに夢中になる人間というのは、あまり頭が良くないので、限度が分からない。それで無茶をして怪我でもしてしまったら、一生不自由を感じることになるかもしれない。だから、子供がスポーツに夢中になりすぎるようなら、周りの大人や先生たちは、ブレーキをかけてやらねばならない。野球ばかりやってないでちゃんと勉強しなさい、と言うべきである。

しかし今では、大人の方が夢中になって子供にスポーツを勧めるありさまである。世も末だと思う。

ロングテール

ロングテール、という言葉をよく聞く。社会における富の分布はロングテールになっているらしい。そのほか様々な社会的指標がロングテールの法則に従っていることを、誰かが証明したという。

ロングテールというのは、変数をｋとしたときに、ｋという値を持つ要素の数がｋの$^{-}$ｒ乗に比例する、という分布のことである。このグラフの形は、たとえば重力の法則に似ている。重力の強さは距離の二乗に反比例するが、それはｋを距離、ｒを２としたときのロングテールのグラフと一致する。

数学的な分析が切り取るのは、あくまでも現実の一側面であり、そのすべてではない。たとえば、資産の分布が人間の生活水準を決めているかといえば、そうではないだろう。まず、資産と収入は異なる。人間の生活水準に直接影響するのは収入であって、資産ではない。もちろん、それらの間には相関関係があるだろうが、その相関関数がどのようなものになるかは、あらかじめ決まっているわけではない。それは社会の形によって変わりうるだろう。お金というのは流動するものなので、その流れる速さや流れ方が問題とされるべきである。

また、ロングテールの形を決めるｒの値や比例係数も、ア・プリオリに決められるわけではない。その値は、もしかすると我々の行動によって調節可能なものかもしれない。

また、度数分布には個性が反映されない。つまり、度数分布が経時的に同じ形をしているからといって、その要素が不変であるとは限らない。要素が入れ替わっていても、グラフが同じ形をとるということはありうる。その入れ替わりをいかに制御するか、ということも一つの課題である。

何が言いたいかといえば、我々自身が、度数分布の形を決めることができるかもしれないし、また、そのグラフが持つ意味を選択することもできるかもしれない。数学は何も語らない。同一の数学的な表現は様々な意味を持ちうるのであり、そこからどのような意味を汲み取るかということは、人間の裁量である。

格差社会

1

このまえ川崎で、路上でバスを待っていた小学生と保護者らが刃物を持った男に襲われ、多数の死傷者が出るという事件があった。この

事件を、弱者を狙った卑劣な犯行と考える人もいるが、それは間違っている。

現代の日本社会では格差が広がっている。収入が高い人は問題ないが、収入が低く日々の生活で精いっぱいの人には、子供を作る余裕などない。そのため今の日本では、子供がいるということが一つのステータスになりつつある。そのような状況が、社会不安を招かないわけがない。

つまり、この事件は弱者を狙った犯行ではなく、社会的な強者を狙ったテロリズムだと考えることができる。子供を殺すということは、その親にダメージを与えることにもなるからである。そのメッセージを、現在の日本で活動する政治家や知識人たちが全く理解できていない、ということが問題なのである。

これを、一人の中年男性が小学生を殺害した、という表面的な事実だけで捉えるならば、卑劣な犯行ということしか言えなくなる。しかし、そのような考え方は、原因と結果の関係を非常に浅い部分でしか捉えていない。そして、そういった浅薄な考察が問題の本質を覆い隠してしまう。

おそらくは、それが目的なのだろう。本人がそれを意識しているのかどうかは分からないが、そういった知識人や政治家たちは、格差社会の中で上位の部類に入る人々である。ゆえに、その問題をうやむやにしてしまった方が、彼らにとっては得なのである。

格差そのものが問題ではないという態度をとることが、格差を固定化することにつながり、それが結局は彼らの利益になっている。無意識にでもそれを理解しているからこそ、彼らには格差の問題が見えなくなる。それで、これは卑劣な犯行だ、としか言えなくなってしまう。

こうした態度の背後にあるのは、因果律に対する誤解である。正しい因果関係は一種類しかない、という誤った考えが、様々な可能性を探ることを妨げてしまう。直接的な因果関係しか見ないことの害は、こういった場面にも現れるのである。

私が言いたいことは、この社会が格差社会でなければ、このような事件は起きなかっただろう、ということだ。しかし、実際には格差社会であるので、こうした事件が起きた。ゆえに、社会の格差がこの事件の原因である。こんなことは、人に言われなくても分かるはずである。誰が見ても明らかな事実である。これを見て見ぬふりをするということは、許されることではない。

この社会が別の形であれば、この事件は起きなかった。そして、そのような社会を作ることは常に可能である。その努力を怠るならば、それはその人自身の責任である。この事件の責任は、この事件を正しく理解することを拒む人々、そして、それを踏まえた上でより良い社会を作る努力を怠る人々にある。

2

格差の原因は経済のグローバル化と、政治がそれに追いついていないことである。経済活動は自由化が進み、資本の移動は流動性を増している。その一方、国家は地域的な性格を持ったままなので、国境を超える資本を国家が制御できなくなっている。

高額所得者や取引額の多い企業から税金を取ろうとしても、彼らは国外に逃げてしまう。だから、政府は大企業や資本家に高い税率をかけられない。そのため、簡単に移動できない一般庶民から、消費税という形で税金を搾り取るしかなくなる。それが格差社会の原因である。

この問題を解決する方法は簡単で、世界政府を作ればよいのである。世界中どこにいても世界政府が税金を取り立てるようになれば、高額所得者から税金を取るのも簡単になる。そうなれば、消費税も必要なくなる。

もちろん、その実現は一筋縄ではいかないだろう。税金の分配をどのように行うか、誰か取り立てを行うかなど、様々な問題を解決しなければならない。また、仮にそういう仕組みができたとしても、五十年持てば大成功で、十年持てばまずまずといったところだろう。

しかし、まずは実行してみなければならない。失敗したらもう一度やり直せばよい。それが必要なことは、きちんと説明すれば理解してもらえるはずである。それ以外に道はないのだから。

世界政府を作るために、カントもヘーゲルも必要ない。民主主義も共産主義も必要ない。必要なのは、税金を取り立てるシステムである。国籍は必要ない。アイデンティティも必要ない。ノードもエッジもない。情報もネットワークも実在しない。すべて戯論である。

戦争と平和

1

核兵器がなくなれば、また戦争ができるようになる。話し合いよりも、戦争で解決したほうが楽なこともたくさんある。平和を実現するためには、何よりも戦争が一番の近道である。

むろんそれは、基本的な道徳が共有できていれば、ということだが。キリスト教徒がいなくなれば、戦争はそれほど残酷なものにはならないだろう。

本当に恐ろしいのは、戦争ではなく無知である。道徳を知らないことである。破局をもたらすものは無知であり、平和をもたらすものは戦争への覚悟である。

どんなときでも、戦争を起こすのはルーズベルトのような馬鹿である。兵の命に責任を持つ将軍は、簡単には戦争を始めない。無責任な将軍はすぐに戦争を始める。

戦争を恐れてはならない。戦争に対する恐怖を利用されてはならない。その結果は、戦争よりも恐ろしい搾取である。

2

キリスト教の宣教師はかなりクレイジーである。彼らは、キリスト教の信仰を広めるためなら何をしてもよいと考えている。神のためなら何をしても許される。だから、神を信じない人間にどんなことをしても、罪にはならない。

そんな人々だったから、戦国時代の日本人が彼らを嫌ったのはあたりまえで、秀吉以来の禁教令と鎖国によって、日本はキリスト教を排除することに一度は成功した。それが江戸末期になると、彼らは装いを新たに再登場した。今度は以前のような野蛮さはなくなり、見た目は立派になっていたが、けっきょく中身はあまり変わっていなかった。キリスト教の排他性は人種差別に変わっただけだし、自己中心的な考え方も全く改まっていない。彼らは一つも進歩していなかったのである。

我々はまず、彼らに戦争のやり方を教えてやらねばならない。責任のとり方を教えてやらねばならない。そのほか様々なことを教えてやらねばならない。学校一の問題児に割り算を教えるように、辛抱強く丁寧に教えてやらねばならない。